

文春文庫

沖の花の菜
(四)

司馬遼太郎



文藝春秋



文春文庫

菜の花の沖(四)

定価はカバーに
表示してあります

1987年4月10日 第1刷

1992年2月5日 第6刷

著 者 司馬遼太郎

発行者 豊田健次

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3-23 〒102

TEL 03・3265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。

印刷・凸版印刷 製本・加藤製本

Printed in Japan
ISBN4-16-710555-1

文 春 文 庫

沖 の 花 の 菜
(四)

司 馬 遼 太 郎



文 藝 春 秋

第四卷 目次

波 濤 7

帰 帆 181

重 蔵 43

東の大灘 213

三筋の潮 73

転 変 269

火山島 112

択捉十五万石 309

択捉島雑記 153

あとがき 376

菜の花の沖
四

波 濤

この末の年（寛政十一年・一七九九年）の三月、嘉兵衛が箱館の浜に上陸すると、
（なんとというにぎやかさだ）

と、去年とは打ってかわつての人の往来の繁さにおどろいてしまった。

（去年はただの荒磯と草のはえた坂道があっただけではなかったか）

ことしは、道路普請の人夫がおおぜい働き、大工が家々をたて、水溜りの多い道を荷運びのひとびとがゆききし、また坂の上には旅姿の武士がやたらめだった。

この日、嘉兵衛は、三橋藤右衛門と高橋三平にあいさつをしてから、坂の途中にある「高田屋」の店に入った。

むろん、この急造の建物も、去年にはなかった。

また隣接してならぶ海産物の倉庫も、できたばかりのものであった。

すべては、箱館店のぬしである金兵衛がやったものである。

倉庫には、金兵衛が買いあつめた加工鰯^{ぼん}、鮭^{さけ}、昆布などが、ぎっしり詰まっていた。これらを、やがては箱館に到着する嘉兵衛の船二艘^{ふたふね}が、すぐさま積みこんで大坂の鞆^{たる}の市^{いち}にはこぶだけでいい。船一艘の一航海で、あらたに何百石積みかの船が一艘買えるほどの収益があがるはずであった。

「金兵衛、こういうことは、決して金儲けと思うな」

と、嘉兵衛はいった。たかが金儲けで、上方と蝦夷地^{えぞち}を往復するという命がけのしごとがつづけられるものではない。蝦夷地を、京のある山城国や江戸のある武蔵国とおなじ暮らしができる土地にするためだ、というのである。

「しかし箱館もにぎやかになつたな」

と、いうと、金兵衛はべつに去年と変わっていない、といった。

武士の姿がやたら目につくのは、幕府が近隣の諸藩に命じ、蝦夷地警備の兵を出させるように命じたためである、とも金兵衛はいった。

「それだけのことです」

金兵衛は、嘉兵衛とはちがい、物事に踊るという性格がなく、若いくせにいつも冷静にしか物を見ず、また語らない。

去る寛政四年（一七九二年）九月三日、ロシアの軍艦が根室湾に入り、次いで箱館に投錨し、幕府に対して通商を要求した事件などがあつて、幕府は北辺警備に神経をとがらすようになった。

松前藩の防備能力が小さすぎるため、奥羽諸藩（南部藩、津軽藩、秋田藩、仙台藩）に人数をわりあてして警備兵を出させていた。

嘉兵衛が見たのは、津軽藩の交代兵が箱館に上陸しただけのことで、とりたてて新規なことではない。

「ただ、噂によりますと、大公儀は来年あたりから、津軽様と南部様に命じ、兵力を倍ちかくなさるそうです」

「それみろ、ご時勢が変わろうとしているのだ」

嘉兵衛が意気どむと、金兵衛はひややかに、

「南部様、津軽様は、財政が火の車というのに、それぞれ五百人出せということで、よほどおつらいことのようにございますよ」

ただでさえ財政の逼迫ひつぱくしている両藩はこれを大迷惑とおもっている、と金兵衛はいった。

幕府が、七年を限って松前藩から借りあげた東蝦夷地は、箱館付近から知床半島までの広大な地域をさす。

嘉兵衛はこの新情勢について、できるだけ多くの情報をあつめたかった。事情を知らなければ、身動きひとつできないのである。

かれが箱館に入ったこの日、金兵衛にすぐたずねたのは、

「松前様の御気色ごきしよくは、大変だろう」

ということであつた。

「大變です」

金兵衛は、すこし青味がかつた目で、嘉兵衛を見つめている。秀麗な容貌ではあつたが、（こいつが弟でなければ、友達にはならないかもしれないな）

と、おもつたりした。金兵衛はべつにわるい人間でないことは嘉兵衛もわかりぬいている。私心も薄く、節義の感覚もある。この二つさえあれば、ほゞ世間は渡れるのだが、ただ利口過ぎ、その利口ぶりが薄い皮膚から透けてみえる。金兵衛は、そういう自分を決して包もうとはしないのである。

「松前様の箱館の沖ノ口役所も立ち腐れです。ときどき御役人衆が、路傍でぼんやり立っているのを見ます。このさきどうなるのか、ご自分でもおわかりにならないのでしょうか」

「金兵衛、いい氣味だろう」

嘉兵衛は、金兵衛をからかった。嘉兵衛も、この「島」ともいえぬほどに広大な地を、ひとにぎりの松前藩の人数が自儘にし、自藩の利のみを考え、蝦夷びとをけもののように酷使し、また自藩の不利になるといふ計算からロシアの南下の事実を幕府にひたかくしにしていきたいままでのこの藩のやり方を悪まないではいられない。

「悪」

というものが、芝居の上ではまじりつけなしのものとして存在するが、浮世にはそういう種類のものはすくなく嘉兵衛はおもっている。しかし蝦夷びとの場から見た松前權力というも

のは、この世で珍奇なほどに純粹悪であつた。

とはいへ、松前藩がこの大州の三分の一強ともいうべき東蝦夷地を取りあげられたことについては、右の筋みちとは矛盾することながら、嘉兵衛は氣の毒に思わざるをえないのである。藩士は窮乏し、首都の福山（松前）城下の町人たちも収入がすくなくなり、従つて職人や人夫もしごとの口がなくなつて憂目（うれしめ）を見るにちがいない。

——いい氣味だろう。

と、金兵衛をからかつたのは、痛快であることはわかる、しかしいい氣味そんな顔をするな、ということであつた。

金兵衛のいうところでは、幕府は松前藩に対しその財政上の負を補わせるために、武蔵国の南端にある久良岐（くらぎ）の地を与えることにした。久良岐はいまの川崎や鶴見あたりをさし、海浜のほそながい地で、五千石の收穫があつた。

しかし東蝦夷地のゆたかな水産物のあがりからみれば、五千石ばかりの地が松前藩にとってありがたいはずがない。

「私が道を歩いていて、松前様の御家中のお方とゆきあつて丁寧（ていねい）に頭をさげても、横をおむきになります。高田屋のやつか、といつて地面に唾（つば）を吐きなさるお人もあります」と、金兵衛はいつた。

東蝦夷地に、

「様似」

という海岸地方がある。海岸が、わずかに船の碇泊をゆるす程度に湾入しているために、松前船がそこによく寄港するということは、嘉兵衛もきいていた。また嘉兵衛は、去年、箱館からアッケシ（厚岸）へゆく航海の途次、様似の沖を通ったとき、三橋藤右衛門が、

「嘉兵衛、あれが様似だ」

と、教えてくれた。

様似は、箱館から船をすすめた場合、嘉兵衛たち船乗りが、

「エリモ様」

と、神に対するようによんでいる襟裳岬よりは、十里ばかり手前の海岸にある。

襟裳岬は、この蝦夷地という大きな島州を南北につらぬく脊梁山脈（日高山脈）の南端が海に落ちこみ、黒い山骨ともいふべき断崖と岩礁が散乱する岬だが、三橋藤右衛門が、

——あれが様似だ。

と教えてくれたのはそのエリモ様を拝む半刻ばかり前であつたような記憶がある。

嘉兵衛が、一閑張の遠眼鏡をかざしてみた様似は、背後に日高山脈の峻峻を屏風のようにひきまわして、北風をふせいでくれそうな地形だった。

野はわりあい広そうで、付近にホロベツ（幌別）川という、季節になるとゆたかに鮭がさかのぼってくる川がある。

海岸の湾入は、たかが知れている。しかし、その大景観からいえば小指のように可愛く突き

出た岬があり、東風からもわずかに碇泊船を守ってくれるにちがいない。また西風が強ければ、その小指のような岬の反対側（東側）に船入れしてもよさそうであつた。

三橋藤右衛門が教えてくれたとき、嘉兵衛は、

「箱館湊のように、神様があたえてくださったような綱（船をつなぐ綱）知らずの湊からみれば、とてものこと、くらべものになりませんが、それでも沖が荒れればあの様似には逃げこめそうでございますな」

と、いうと、三橋藤右衛門は、

「ほほう、わしはもつとましな湊かと思つておつた」

といつた。三橋は嘉兵衛の低い評価が、やや意外なようであつた。

「なにか、様似について格別な御見込みでもお持ちなのでございますか」

と、嘉兵衛は、貴人に対して非礼とは思いつつも、自分のほうから質問してみた。

「あつた」

と、三橋はいつたが、内容はいわなかつた。

こんど、嘉兵衛は箱館にやつてきて、十日ほどのあいだに、しきりに様似という地名を耳にした。

金兵衛からきいた話では、幕府は東蝦夷地を臨時の天領（直轄領）にするにあたつて、一時、様似を治所ちしよにする案を持ったという。箱館は最良の港湾ではあるが、松前藩のにおいがつよすぎる上に、江戸から蝦夷地へ直航する太平洋航路を確立しようとすれば、地理的には様似が近

いのである。が、いくつかの理由で廃案になり、箱館が治所になった。

嘉兵衛は箱館に入ってちょうど十一日目に、幕府の仮役所から差紙さしがみ（よびだし状）がきて、御用がある。

と、いう。すぐゆくと、三橋藤右衛門と高橋三平が、書類をあちこちにつみあげた広い御用部屋にすわっていた。嘉兵衛はむろん身分柄、そこへは入れない。板敷の廊下にすわらされた。「やあ、嘉兵衛、そちの顔を三日も見ぬと淋しいわい」

と、三橋藤右衛門は、心からの声を出して、うれしいことばをかけてくれた。そのそばで、三橋以上に嘉兵衛好きの高橋三平が、顔をほころばせてじっと見つめてくれている。嘉兵衛は、ばかなことに、涙をあふれさせてしまった。

（自分をそこまで買って、それほどまでに好いてくれている）

という人にめぐりあうほど、人の世でのよろこびはない。むかし、唐土からくしでは、こういう感動のために男は命をすてる、という激しい言葉が書かれている書物があるということをきいている。

一面、嘉兵衛は、商人であった。

世に商人ほど、物や人を見る目と姿勢が冷静なものはないと嘉兵衛はおもっていた。

——商人あきんどたる者は、欲に迷うな。

とさえ、嘉兵衛は、自分の手育ての者たちに教えてきたのは、一種の極端な表現であった。

利と欲とはちがうのだ、ということを教えるための表現で、世間をひろく見渡すに、欲で商いをする者はたとえ成功しても小さくしか成功せず、かりに大きく成功してもすぐほろぶ、ともいった。

この極端な表現は、商いの上で私情を出すな、と嘉兵衛がかれらにいつていることにもつながっている。自分の趣味、嗜好、あるいは商いの相手を私的に好きだというだけで利の潮から外れた舟のうごかし方をするな、ということをも意味していた。

対明貿易を中心とした広域商業というのは、室町期において一勃興を見、戦国期、織豊時代へとつづく。

室町の商人たちは、位階や武力という權威だけがまかりとおる中世末期の世にあつて、物や人、それに世間というものを冷静に見、秤や枰ではかるようにその重さやかさを知り、さらには物の背景にある人間のほかに、はるか海外の地理、物産、世情、人情を知った。

そのように冷静な室町の商人たちは、

「好き」

ということをして、商人の敵として戒めあつた。「好き」は、物好みのことなのである。物好み
が激しくなると、精神の平衡を欠き、ついには現実に対する目をうしなう。その危険を知りながら、あるいは十分にわきまえた上で、美的世界に遊ぶという精神現象を、術語として数寄
(数奇)とよんだ。

数寄は、そのような毒をふくんだことばであつたが、嘉兵衛は蝦夷地を利の対象としてのみ